



## 外来語名詞「パターン」の助数詞への進出

著者	田中 佑
雑誌名	言語学論叢 オンライン版
号	第9号（通巻35号）
ページ	1-14
発行年	2016-12-21
その他のタイトル	Emergence of loanwords "patan (pattern)" as Japanese classifiers
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00144817">http://hdl.handle.net/2241/00144817</a>

# 外来語名詞「パターン」の助数詞への進出

田中 佑

## 要 旨

本稿の目的は、(1)「現代日本語における外来語の助数詞への進出」の事例として「パターン」を取り上げ、その進出の様相を記述すること、(2)「パターン」「ケース」「タイプ」の事例から一般的な意味が名詞の助数詞化に与える影響を明らかにすること、の2点である。(1)について、外来語「パターン」は戦前・戦中の新聞などではほとんど用いられることはなかったが、1970年頃から規範意識の働く書きことばでも見られるようになり、2000年前後に助数詞用法を獲得したと推定される。(2)について、具体物の数を表現する助数詞の場合は、事物の形状や性質などの移り変わりという社会的要因が根源的な変化誘因となり得るが、一般性の高い意味を有する「パターン」「ケース」「タイプ」のような語の場合は、専ら言語的要因が変化を誘発すると捉えられる。

## キーワード

助数詞 外来語 一般的意味 用法拡張 言語外的・内的要因

## 1 はじめに

日本語の助数詞(もしくは、類別詞)については、次のような意味的分類が提唱されている<sup>1</sup>。

(1)a. 個別類別詞：最小としての個体を個別化する類別詞

人(り・ひと)、匹、本、枚、粒、台、丁、個、つ、など

b. 集合類別詞：個体が集まったグループを最小単位とする類別詞

対、足、束、輪、山、セット、グループ、列、チーム、など

c. 計量類別詞：量を測る類別詞

杯、匙、袋、切れ、抱え、包み、キロ、グラム、トン、など (水口 2004:64)

田中(2016)では、(1a)は(1b)(1c)に比べて外来語<sup>2</sup>が進出し難い領域であったが、近年、(1a)

<sup>1</sup> 影山・眞野・米澤・當野(2011)は、(1c)に属する語と(1b)の一部を「計量詞」とし、計量詞は、数量を表す機能は持つが、名詞の意味カテゴリーを限定するという類別詞本来の働きは持っていないとする。このように、類別詞の範囲に関してはいくつかの捉え方があるが、本稿では、議論を複雑にしないために、(1)の分類を用いておく。

<sup>2</sup> ここでは特に幕末以降に増加した英語を原語とする外来語を想定している。

にも、次に示すような外来語が進出してきていると捉えられることを指摘した<sup>3</sup>。

- (2) ただし、男性個人に対するヒアリングの中で、育児休業取得希望を申し出た際に上司が否定的な反応を示したという事例が1ケースあった。

『佐藤博樹・武石恵美子『男性の育児休業』2004』

- (3) トックリセーターを着た聖子の上半身写真と別カットで撮ったヒット・ビットの製品写真を合成したポスターを主要な駅に4タイプ並べて貼ると、次々と盗まれた。

『城島明彦『ソニー燃ゆ』2001』

- (4) お薦めは、オフの日用の服を季節ごとに上下セットで2~3パターン用意しておくことです。

『朝日新聞 2011/4/30』

- (5) 同社の「楽天モバイル」はドコモのLTEに対応する音声付きSIMカードを4プラン用意しており、月額は1250~2960円。大手と比べて最大3分の1になる点がウリだ。

『<http://toyokeizai.net/articles/-/54608>』

(田中 2016:82-83)

(2)~(4)に挙げた外来語のうち、「ケース」「タイプ」「パターン」は、『分類語彙表 増補改訂版』において中項目「1.11 類」に分類されているように、「たぐい」(≡「共通した属性」)という一般性の高い意味を持つ点で共通性を有する。「ケース」「タイプ」については田中(2016,投稿中)で分析を行ったため、本稿では残る「パターン」を取り上げ、その個別類別詞領域への進出の様相を明らかにするとともに、「パターン」「ケース」「タイプ」のような一般性の高い意味を有する語が助数詞用法を獲得する際の特徴について論じる。

## 2 先行研究にみる外来語「パターン」の近現代における使用状況

外来語「パターン」を直接の対象とした研究は見られないが、外来語の量的推移に関する調査を行っている橋本(2010)、金(2011)に、各資料、各年代における「パターン」の出現(度)数が提示されているため、それを以下に引用する。なお、(6)(7)は、橋本(2010)、金(2011)が調査対象としている資料である。

### (6) 橋本(2010)の調査資料<sup>4</sup>

#### a. 『朝日新聞社説』(1911~2005年)

<sup>3</sup> 出典を記したものは実例であるが、数詞の表記は算用数字に統一している。また、用例内で置換を行っているものについては、左を原典に統一する。

<sup>4</sup> 朝日新聞の調査は、1,140日分(1911~2005年までの95年間の毎年12日分)1,768本の社説を、読売新聞の調査は、1932~2002年までの70年間を5年毎にサンプリングし、各年12日分計180日の社説を対象としている。また、政府4演説は、「内閣総理大臣の「施政方針演説」、外務大臣の「外交演説」、財務大臣(2000年までは大蔵大臣)の「財政演説」、経済財政政策担当大臣(2000年までは経済企画庁長官)の「経済演説」(橋本 2010:181)」を指し、計216本の演説が調査対象とされている。

b. 『読売新聞社説』(1932～2002 年)

c. 『政府 4 演説』(1955～2009 年)<sup>5</sup>

(7) 金(2011)の調査資料

『毎日新聞縮刷版』(1950、60、70、80 年)、『CD-毎日新聞’ 91 データ集』、『CD-毎日新聞 200 年データ集』の毎月 5 日、25 日(休刊日の場合は翌日分)の計 24 日分のうち、東京地方版・大阪本社版の紙面を除く朝刊全紙面

表 1 『朝日新聞社説』における「パターン」の出現度数(橋本 2010:298)

	全 度 数	各年代の出現度数										ジャンル			
		10 年	20 年	30 年	40 年	50 年	60 年	70 年	80 年	90 年	00 年	政経			他
パ タ ー ン	7							4	2	1		4			3

表 2 『読売新聞社説』における「パターン」の出現度数(橋本 2010:342)

	全 度 数	各年の出現度数														
		32 年	37 年	42 年	47 年	52 年	57 年	62 年	67 年	72 年	77 年	82 年	87 年	92 年	97 年	02 年
パ タ ー ン	5									1		1	3			

表 3 金(2011)の調査における「パターン」の出現数<sup>6</sup>

	50 年	60 年	70 年	80 年	91 年	00 年
用例数	0	0	12	21	8	16
出現率	0	0	5.57	9.85	4.39	6.86

橋本(2010)、金(2011)の調査結果より、外来語名詞「パターン」は 1970 年頃には新聞のような規範意識の働く媒体でも姿を見せるようになっていたと捉えられる。しかし、上記の先行研究はともに助数詞用法を含む数詞と結合した「パターン」をカウントしていないため、上記の表からは「-パターン」の助数詞用法の成立時期を推定することはできない。

以上を踏まえ、次節以降では、近代から現代にかけての外来語「パターン」の使用状況を再調査し、「パターン」の助数詞用法の成立時期の推定を行うことから始める。

<sup>5</sup> 『政府 4 演説』の調査では「パターン」は得られなかったようである。

<sup>6</sup> 金(2011)は国立国語研究所(1987)で提案されている方法を援用し、各外来語の増加傾向係数も算出している。

### 3 助数詞認定の基準

数詞と結合した「パターン」が、現代語において、助数詞の認定基準を満たすことは、田中(2016:101)ですでに述べたが、その点について、ここで改めて確認しておく。

田中(2016)では、田中(2012,2014)で提案した(8)を助数詞認定の基準として用いた。

(8)a. 数詞と結合して数量詞を成す

b. 数を表現される名詞と共起し、かつ、副詞的位置に生起する (田中 2014:26)

しかし、田中(投稿中)では、東条(2014)が提唱している(9)も併せて使用した。

(9) 疑問数「何(なん)」を冠することができる (東条 2014:21)

(8)は統語的・品詞的観点を重視したもの、(9)は意味的観点を重視したものであるが、東条(2014:26)が述べるように、多少のずれはあるものの、(8)を用いて抽出した助数詞と(9)を用いて抽出した助数詞はおおよそ一致する。したがって、(8b)(9)は、ある要素が助数詞としての性質を獲得した際に観察可能になる2つの現象を指している可能性が高い。そうであるならば、(8b)と(9)はほぼ同時期に観察されるようになるはずであり、助数詞用法獲得時期の推定には、(8)(9)の両方を用いることが有効であると考えられる。

以上の議論に基づき、4節では(8)(9)の2つの基準を用いて「-パターン」の助数詞用法の成立時期を推定する。

### 4 「パターン」の助数詞用法の成立時期

本節では、田中(2016,投稿中)でも用いた8つのコーパス・データベース<sup>7</sup>に関する調査から、外来語「パターン」の助数詞用法の成立時期の推定を試みる。コーパス・データベースおよび調査範囲は以下のとおりである。

- ①『明六雑誌コーパス』(1874～1875)
- ②『国民之友コーパス』(1887～1888)
- ③『近代女性雑誌コーパス』(1894～1925)
- ④『太陽コーパス』(1895～1925)
- ⑤『神戸大学デジタル版新聞記事文庫』(1911～1945)
- ⑥『『国会会議録』パッケージ』(1947～2012)
- ⑦『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(1976～2005)
- ⑧『聞蔵Ⅱビジュアル』「朝日新聞(朝刊)」(1985～2014)

---

<sup>7</sup> ジャンルやデータ量が統一されていないといった問題もあるが、さらなる調査は今後の課題とする。

①～⑧を対象に「パターン」および「パタン」を検索ワードとして調査を行った。結果、①～④からは用例を得ることはできなかった。また、⑤からは(10)を得たが、以下に示すように、文脈を参照しても本稿が対象としている「パターン」であると断定できない用例であった。

(10) 鍛冶用機類

スチーム、ハンマー、エーヤ ハンマー、整形ハンマー、ドロツ ハンマー

パターン ショツプマシン類

土木鑄盤、小口作型機、複軸面取鉋、チェーン モーチサー、自動木型製造機…

『大阪時事新報 1921/5/27』

⑥は話しことば的な性質を持つ資料であるが、下に示すように「パターン」の使用が確認された。

- (11) 新憲法によるわれわれの生活は米国のデザイン、意匠により、パターンすなわち形によつて、生活指針を與えられた。

『世耕弘一氏発言『第7回衆議院予算委員会』1950/2/6』

- (12) この第3条、第5条が何とおっしゃっても、これはアメリカと各国が加わった2国間、あるいは多数国間の条約にあるバンデンバーグ決議を軸とするいわゆる相互防衛条約のパターンである、これは明瞭です。

『曾祢益氏発言『第34回参議院予算委員会』1960/3/5』

- (13) この方式によりまして、財政規模が急激に膨張することを抑制するとともに、財政が国民経済に過度の刺激を与えないようにし、企業並びに家計が自発的に拡大発展を遂げていくような成長のパターンを期待していたわけであります。

『日高広為氏発言『第51回参議院本会議』1966/1/18』

また、⑥～⑧からは、数詞と結合した用例も見られた。

- (14) でも、プロジェクションとしてはこの4パターンが提出されておるわけですから、我々はこれを前提にする。

『古賀一成氏発言『第147回衆議院予算委員会』2000/2/16』

- (15) 女子の生涯を通じた就業パターンは、長い間就業を続けるという「係属就業型」、就業後結婚や出産等により一時家庭に入るが再び就業するという「再就業型」、就業後結婚や出産等を契機として家庭に入るという「家庭回帰型」、生涯就業しないという「不就業型」の4パターンに大別できるが、…

『労働白書 平成3年版』1991』

- (16) 四面にとりつけられるネオンは赤色を基調に黄色と白を組み合わせ、点滅しながら  
36 パターンの図柄を描く予定だ。 『朝日新聞 1985/11/10』

そして、以下に示すのが、本調査において確認された(8)(9)を満たす「-パターン」の助数詞用法の初出例である。

- (17) エンディングテーマ(ビバノン音頭)の譜面は、長さの違うものを 3 パターン用意して、残りの時間に応じて、どれか一つをバンド(岡本章生とゲイスターズ)に渡しました。 『加藤義彦 『8 時だヨ! 全員集合の作り方』 2001』
- (18) 夫の出張用、リゾート用など目的別に何パターンか作っておくとさらに便利です。 『稲田智子 『MINE 2001 年 9 月号』 2001』

以上より、「パターン」は戦前・戦中の新聞などではほとんど用いられることはなかったが、1970 年頃から規範意識の働く書きことばでも見られるようになり、2000 年前後に助数詞用法を獲得したと推察される<sup>8</sup>。

## 5 「-パターン」の助数詞用法の意味と用法

1 節で述べたとおり、「パターン」は『分類語彙表 増補改訂版』において、「ケース」「タイプ」とともに中項目 [1.11 類] に分類されている。さらに細かな分類を参照してみると、3 語は中項目よりも一段階細かい「分類項目」においても、同じく [1.1100 類・例] に分類されており、「パターン」と「タイプ」に至っては、さらに細かな分類においても同じカテゴリー( [1.1100-06] )に位置付けられている。「タイプ」については、田中(投稿中)で「種類」と比較を行っており、「タイプ」も「種類」も現代語において助数詞用法を有していると捉えられる。

以上を踏まえ、本節では、「-パターン」の助数詞用法(以下、助数詞「-パターン」<sup>9</sup>)の比較対象に「-タイプ」「-種類」を設定し、「-タイプ」「-種類」との比較をとおして、助数詞「-パターン」の意味と用法を記述する。

助数詞「-パターン」は、(19)のような具体物から、(20)のような抽象物や(21)のような動作的なものの数まで表現することが可能であり、いずれも「-タイプ」「-種類」と置換が可

<sup>8</sup> 田中(2016:86-87)では、外来語助数詞を論じる場合、当該の外来語が助数詞体系に採り入れられるまでのプロセスを確認する必要がある、そのプロセスには、少なくとも、(1)原語の助数詞用法が直接輸入されたというプロセスと、(2)原語からは名詞として輸入され、のちに日本語の中で助数詞用法を派生させたというプロセス、の2つが想定されることを述べた。名詞「パターン」については、名詞としての使用と助数詞用法の成立までに時間差があることを加味すると、助数詞「-パターン」の採用のプロセスは後者であると考えられる。

<sup>9</sup> 以下の議論では、当該要素を助数詞として扱う場合は「-」を付し、名詞と区別する。

能である。

- (19) 白木に赤色の色分けがされた 6 {パターン／タイプ／種類} の立方体を自由に組み合わせて、気に入ったパターンやオブジェを作っていきます。

『著者不明『世界のおもちゃ 100 選』2003』

- (20) 事前に、例年の授業を参考に 4 {パターン／タイプ／種類} の時間割りを考え、結局、月曜から金曜まで毎日、2 コマから 4 コマをとった。『朝日新聞 1998/10/17』

- (21) 応援団がない野球部の依頼で、1 カ月ほど前から 1 日 2 時間ほど練習し、6 {パターン／タイプ／種類} の踊りを覚えたそうだ。『朝日新聞 1994/6/15』

しかし、次のような場合、「-タイプ」は多少すわりが悪くなり、「-種類」は、解釈上は問題ないが、「-パターン」とは異なるニュアンスを表すようになる。

- (22) このため、「県内 5 つの活断層ごとに想定した」滋賀県や、「直下型、海溝型合わせて 8 {パターン／?? タイプ／種類} の想定をした」千葉県などのように、地震の被害想定が細かく複雑になる傾向も出ている。『朝日新聞 1996/9/1』

- (23) 改善により、データベースのシミュレーションは 260 から 1488 {パターン／?? タイプ／種類} に増え、太平洋上の観測点なども約 13 倍の 391 点になり精度が上がりました。『朝日新聞 2014/8/2』

この相違を説明するために、まず、「パターン」とその類義語の辞書による語釈を見てみる。

『広辞苑 第 6 版』

- ・パターン【pattern】①型。類型。様式。「ワン・一」「行動一」②図案。図像。「テスト・一」〈以下、省略〉(p.2255)
- ・タイプ【type】①型。類型。典型。「新しい一」の車」「役人一」②自分の好みである、人の類型。〈以下、省略〉(p.1695)
- ・しゅ-るい【種類】いくつかの個体に共通の性質によって分類しまとめたもの。また、そのようにして総体を分類したときに生ずるまとまり。「花の一」〈以下、省略〉(p.1354)

『明鏡国語辞典 第 2 版』

- ・パターン【pattern】〔名〕①型。類型。「ワン一」②図案。模様。「テスト一」(p.1403)
- ・タイプ【type】〔名〕①型。型式。「古い一」の洗濯機」②人のある共通する特性によって分けたときの典型。類型。「好きな一」「芸術家一の人」〈以下、省略〉(p.1035)
- ・しゅ-るい【種類】〔名〕ある基準によって物事を分類した、それぞれの集まり。



「さまざまな一の書籍」(p.811)

「パターン」「タイプ」に共通する語釈の一部である「類型」は「一定種類に属するものごとに共通する形式。同種のものごとからその特徴を抜き出して作った型。(『広辞苑 第6版』p.2974)」、「性質や特徴の似ているものを集め、その共通点を取り出してまとめあげた型。(『明鏡国語辞典 第2版』p.1839)」であることから、3語に共通する意味として「共通した属性に基づいて分類された集合」といった意味を想定することができる。

その一方で、「パターン」には、それとは異なる「図案、模様」といった意味があることがわかる。「図案、模様」とは「色や形の組み合わせ」であり、「-パターン」はそのような意味を有するため、数を表現される事物が組み合わせ・動的であることを積極的に表すと捉えられる。それに対し、「-タイプ」は、名詞「タイプ」が「新しいタイプの車」「古いタイプの洗濯機」のように人工物によく用いられることからわかるように、「型式」といった意味が強く、「-パターン」とは反対に、数を表される事物が単一的・静的であることを積極的に表すと考えられる。また、「-種類」は、単一的・組み合わせ的、静的・動的といった区別を積極的に表すことはせず、共通した属性に基づいてまとめあげた事物を最小単位として示していると言える<sup>10</sup>。

以上を踏まえて、上記の用例を確認してみると、(19)～(21)はその抽象的な型を単一的・静的にも組み合わせ的・動的にも捉えられるのに対し、(22)の地震被害の想定や、(23)のシミュレーションはどちらも動的にしか捉えられないため、単一的・静的であることを積極的に表す「-タイプ」は許容度が落ち、組み合わせ・動的であることを積極的に表すことをしない「-種類」はニュアンスが変化したのだと理解される。

加えて、「-パターン」は、田中(投稿中)で「-タイプ」にあって「-種類」にはない用法として指摘したリスト用法も可能である。

(24) タイプ A : …

タイプ B : …

タイプ C : …

以上の3タイプは、形状による分類である。

(25) \*種類 A : …

種類 B : …

<sup>10</sup> 「-パターン」と「-タイプ」「-種類」とでは、次のような違いも存在する。

- (i)a. 5パターン 10種類(のメッセージ)
- b. 5種類 10パターン(のメッセージ)
- (ii)a. 5タイプ 10パターン(のメッセージ)
- b.?? 5パターン 10タイプ(のメッセージ)
- (iii)a. 5タイプ 10種類(のメッセージ)
- b. 5種類 10タイプ(のメッセージ)

しかし、現段階ではなぜこのような違いが現れるのかは不明であるため、ここでは現象の指摘にとどめる。

種類 C : …

以上の3種類は、形状による分類である。

(26) パターン A : …

パターン B : …

パターン C : …

以上の3パターンは、波の高さによって想定されたものである。

以上のような「-パターン」と類義語との意味・用法の差異は助数詞「-パターン」の使用の一定量の確保に貢献するものである。したがって、新たに生まれた表現の定着の要因として位置付けることはできる。しかし、なぜ「パターン」が助数詞に進出したのかという問いの答えにはならない。

次節では、「パターン」に、田中(2016,投稿中)で取り上げた「タイプ」「ケース」を加え、一般性の高い意味を有する語が助数詞化する場合の特徴について論じる。

## 6 「パターン」「タイプ」「ケース」に見る一般性の高い意味を有する語の助数詞化

まず、本稿の調査と田中(2016,投稿中)を基に、「-パターン」「-タイプ」「-ケース」についてまとめる。

表4 3つの外来語の助数詞用法獲得の推定時期など

	用法獲得推定時期	既存の助数詞
「-パターン」	2000 年前後	「-種類」
「-タイプ」	1990 年前後	「-種類」
「-ケース」	2000 年前後	「-例」

【表4】から、「パターン」「タイプ」「ケース」には3語が助数詞用法を獲得する以前から、同じように一般性の高い意味を持つ助数詞が存在していたことがわかる<sup>11</sup>。田中(2015)では、類義語「-戸」の用法の縮小を誘発した産業革命という社会変化が助数詞「-店」の成立の要因となったと考えられることを示した。しかし、「-パターン」「-タイプ」「-ケース」の類義語「-種類」「-例」は、3語と同様に意味の一般性が高く、田中(投稿中)で述べたとおり、そのような語が社会的要因に起因する、数を表現される名詞の指示対象となる事物の変化の影響を受けるとは考え難い。これは、助数詞そのものの意味と、共起名詞の意味カテゴリーによって、日本語における助数詞の新生の要因を類型化することができる可能性を示していると同時に、「-パターン」「-タイプ」「-ケース」のような一般性の高い意味を有する語の成立要因については、「-店」とは異なるレベルで考える必要があること

<sup>11</sup> 「-例」も「-種類」も近代語の段階ですでに助数詞の認定基準を満たす用例が確認される。詳しくは田中(2016,投稿中)を参照されたい。

も意味している<sup>12</sup>。

では、本節で取り上げている一般性の高い意味を有する3つの外来語の助数詞への進出はどのように捉えられるのか。

上記の点に加え、【表4】からは、3つの外来語が助数詞用法を獲得したのは20世紀末以降であることが読み取れる。個別類別詞領域に進出していると捉えられる以下の外来語についても、詳しい調査を行わなければ断定はできないが、20世紀末以前から助数詞として用いられていたとは考え難い。

(27) 同社の「楽天モバイル」はドコモのLTEに対応する音声付きSIMカードを4プラン用意しており、月額は1250～2960円。大手と比べて最大3分の1になる点がウリだ。  
『[http://toyokeizai.net/articles/-/54608\(=5\)\)](http://toyokeizai.net/articles/-/54608(=5)))』

(28) 米Appleは2017年に新たなiPadを3モデル発売する――。  
『<http://www.itmedia.co.jp/news/articles/1608/16/news047.html>』

(29) 本送電線は、高標高（最高約1,600m、平均約860m）の過酷な自然環境の山岳地を経過するため、耐氷雪設計の観点から全線にわたり支持物として我が国ではめずらしい1回線水平配列方式の「えぼし型鉄塔」を適用し、それを2ルート建設して2回線送電線としている。  
『<http://overhead-tml.net/tml2/azumikansen.html>』

したがって、個別類別詞領域への外来語の進出は20世紀末以降に集中して生じている現象であると位置付けることができる。

ここで問題となるのが、なぜ個別類別詞領域への外来語の進出は20世紀末以降に集中するのか、である。

金(2011:6)は外来語の基本語化について、「20世紀の後半を通じて徐々に進行し、20世紀末になって顕在化してきたのではないかと想像できる」とする<sup>13</sup>。基本語化とは、一定の言語使用領域において広範囲・高頻度に用いられる単語の集合を「基本語彙」、その集合の要素を「基本語」と呼んだ場合に、それまで非基本語彙の位置にあった語が基本語の仲間入りをするという現象(金2011)である。

田中(2016,投稿中)と本稿で取り上げている外来語名詞の個別類別詞への進出は、上に引用した外来語の基本語化の延長上で捉えられるものであると考えられる。すなわち、外来語が基本語彙に定着し、日本語の基本語彙における外来語の比率が上昇していく中で、それまでは外来語を用いることに抵抗のあった領域においても外来語を使用することが許容されるようになり、外来語の基本語化が顕在化する20世紀末を境に、それまで外来語が進

<sup>12</sup> 本稿で扱っているのは外来語のみであるが、和語・漢語においても同様のことが言える。

<sup>13</sup> 基本語化とは、一定の言語使用領域において広範囲・高頻度に用いられる単語の集合を「基本語彙」、その集合の要素を「基本語」と呼んだ場合に、それまで非基本語彙の位置にあった語が基本語の仲間入りをするという現象(金2011)である。

出し難い領域であった個別類別詞にも外来語が進出してきたのである。

以上から、「個別類別詞領域への外来語の進出がなぜ 20 世紀末以降に集中するのか」という問いに対する本稿の回答は、「外来語で表現することが不自然な領域に外来語が進出するためには、日本語の語彙体系が、それが許容されるだけの状態にならなければならず、20 世紀末にその状態が形成されたため、個別類別詞領域への外来語の進出はそれ以降に集中している」となる。また、それを踏まえて、「パターン」「タイプ」「ケース」の助数詞化について述べるなら、「一般性の高い意味を有する語が助数詞化する場合、名詞の指示物の在り方の変化には左右されず、専ら言語の語彙体系の在り方に影響を受ける」と言える。

## 7 まとめと今後の課題

以上、本稿では、助数詞への進出を果たしたと捉えられる外来語「パターン」を取り上げ、その進出の様相を明らかにするとともに、「パターン」「タイプ」「ケース」のような一般性の高い意味を有する語が助数詞用法を獲得する際の特徴について論じてきた。本稿の課題とそれに対する回答をまとめると以下のようになる。

- ・ 外来語「パターン」の助数詞への進出はいつ頃か。
  - 外来語「パターン」は戦前・戦中の新聞などではほとんど用いられることはなかったが、1970 年頃から規範意識の働く書きことばでも見られるようになり、2000 年前後に助数詞用法を獲得したと推定される。
- ・ 「パターン」「タイプ」「ケース」のような一般性の高い意味を有する語が助数詞用法を獲得する際の特徴とは何か。
  - 一般性の高い意味を有する語が助数詞化する場合、名詞の指示物の在り方の変化には左右されず、専ら言語の語彙体系の在り方に影響を受ける。

後者は、名詞の指示物の在り方の変化に影響を受ける助数詞の新生(「-店」の成立)と比較した場合、助数詞そのものの意味の一般性と、共起名詞の意味カテゴリーによって、日本語における助数詞の新生の要因を類型化することができる可能性を示唆している。しかし、それを体系的に示すためには、社会的要因と言語的要因をつなぐ言語主体(=人間)の位置付けについて考えなくてはならない。言語変化は言語そのものが主体的に起こすものではなく、必ず言語主体である人間の関与を必要とする。したがって、社会的要因が主たる誘因となる「-店」のような場合と、言語的要因が主たる誘因となる「-パターン」「-タイプ」「-ケース」のような場合のどちらであっても、言語主体の役割は重要であると考えられる。しかし、その位置付けについては今後の課題としたい。

また、上述した 2 種類の助数詞の新生は成立要因に関する類型である。助数詞の新生における変化の過程についても、同様に類型化できるのか、それとも、変化のプロセスについては統一的に説明(=一般化)できるのかについては未だ明らかではないが、これについ

でも課題としたい。

## 付記

本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金 課題番号 16H06653 「近現代日本語における助数詞の新生に関する語彙論的研究」(研究活動スタート支援、平成28年度～平成29年度、研究代表者：田中佑) の助成を受けて行われた研究の成果の一部である。

## 参考文献

- 影山太郎・眞野美穂・米澤優・當野能之 (2011)「第1章 名詞の数え方と類別」影山太郎 (編)『日英対照 名詞の意味と構文』10-35,大修館書店.
- 金愛蘭 (2011)「20 世紀後半の新聞語彙における外来語の基本語化」『阪大日本語研究 別冊 3』大阪大学大学院文学研究科日本語学講座.
- 国立国語研究所 (1987)『国立国語研究所 89 雑誌用語の変遷』秀英出版.
- 田中佑 (2012)「日本語助数詞の範囲—名詞と助数詞の連続性—」『筑波応用言語学研究』19: 117-126,筑波大学人文社会科学研究科文芸・言語専攻応用言語学領域.
- 田中佑 (2014)「近現代日本語における新たな助数詞の成立と定着」筑波大学博士論文.
- 田中佑 (2015)「助数詞「-店」の成立の過程と定着の要因」*Ars Linguistica* 22: 49-64 日本中部言語学会.
- 田中佑 (2016)「現代日本語における助数詞への外来語の進出—抽象的概念を表す「-ケース」を例に—」『文藝言語研究』70: 81-106,筑波大学大学院人文社会科学研究科文芸・言語専攻.
- 田中佑 (投稿中)「外来語名詞「タイプ」の助数詞への進出」
- 東条佳奈 (2014)「名詞型助数詞の類型—助数詞・準助数詞・疑似助数詞—」『日本語の研究』10(4): 16-32,日本語学会.
- 橋本和佳 (2010)『現代日本語における外来語の量的推移に関する研究』ひつじ書房.
- 水口志乃扶 (2004)「日本語の類別詞の特性」西光義弘・水口志乃扶 (編)『類別詞の対照』61-77,くろしお出版.

## 参照資料

- 『聞蔵Ⅱビジュアル』、朝日新聞社
- 『近代女性雑誌コーパス』、国立国語研究所、2006
- 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』、国立国語研究所、2011
- 『広辞苑 第6版』、新村出(編)、岩波書店、2008
- 『神戸大学デジタル版新聞記事文庫』、神戸大学附属図書館
- 『国民之友コーパス』、国立国語研究所、2014
- 『『国会会議録』パッケージ』、山口昌也、国立国語研究所、2014

『太陽コーパス』、国立国語研究所(編)、博文館新社、2005

『分類語彙表 増補改訂版』、国立国語研究所(編)、大日本図書、2004

『明鏡国語辞典 第2版』、北原保雄(編)、大修館書店、2010

『明六雑誌コーパス』、国立国語研究所、2012

(田中佑 筑波大学)

# Emergence of loanwords “patan (pattern)” as Japanese classifiers

TANAKA Yu

The purpose of the present study is twofold: (1) to carry out a case study that traces the emergence of the word “patan (pattern)” as a classifier; and (2) to examine the influence of semantic content on the process of a noun becoming a classifier through the example of “patan (pattern)”, “keisu (case)” and “taipu (type)”. The main findings regarding (1) are as follows. The loanword “patan” was rarely used in the newspapers around the year 1945, but could be seen in the written texts from 1970 onwards; we can estimate that its usage as a classifier was established around the year 2000. With regards to (2), though terms having a generic meaning such as “patan”, “keisu” and “taipu” are influenced by what can broadly be referred to as social factors, it is mainly linguistic factors that trigger the change in usage.